

各農業改良普及センター所長 様
各農業協同組合長（営農担当者） 様
各病害虫調査協力員 様
各農業関係機関長・団体長 様

京都府病害虫防除所長
（公印省略）

病害虫発生予察情報について
下記のとおり発表しましたので送付します。

病害虫発生予報第6号（8月）

予報の概要

作物名	病害虫名	予想発生量 < 平年比（前年比） >	作物	病害虫名	予想発生量 < 平年比（前年比） >
イネ	穂いもち	やや少（並）	チャ	炭そ病	山城 やや少（並） 丹波 並（やや多）
	紋枯病	やや少（やや多）		もち病	並（並）
	ニカメイチュウ	並（並）		チャノコカクモンハマキ	山城 やや少（やや少） 丹波 やや多（やや多）
	セジロウンカ	やや少（やや少）		チャノホソガ	山城 やや多（多） 丹波 並（並）
	トビイロウンカ	並（並）		カンザワハダニ	山城 少（並） 丹波 並（少）
	ツマク ^ド ヨコハ ^イ	やや少（やや少）		チャノミド ^リ メヨコハ ^イ	山城 並（並） 丹波 並（並）
	斑点米カメシ類	やや多（やや多）		チャノキロアサ ^{ミウマ}	山城 並（並） 丹波 やや少（並）
コブノメイガ	並（少）				
黒大豆	吸実性カメシ類	やや多（多）	野菜	うどんこ病（果菜類）	並（並）
	サヤムシガ類	並（やや少）		べと病（キュウリ）	並（少）
	ハスモンヨトウ	やや少（やや多）		褐斑病（キュウリ）	やや多（並）
アズキ	ハスモンヨトウ	やや少（やや多）		炭そ病（キュウリ）	並（並）
	ハダニ類	並（多）		斑点細菌病	並（並）
果樹	ナシ黒斑病	並（並）		（トウガラシ、キュウリ）	並（並）
	ブドウべと病	少（やや少）		ハダニ類	少（少）
	カキ炭そ病	並（並）		ハモク ^リ ハ ^エ 類	並 - やや多（並）
	カキうどんこ病	やや少（やや少）		（果菜類）	
	カメシ類（果樹全般）	並（並）		アサ ^{ミウマ} 類（果菜類）	並（やや多）
	ハダニ類	やや少（やや少）		ネキ ^{アサ} ミウマ（ネキ ^{アサ} ）	やや多（やや多）
				ネキ ^{ハモク} リハ ^エ	並（やや多）
				ハスモンヨトウ	やや少（やや多）

用語の定義

1 半旬のとり方

	第1半旬	第2半旬	第3半旬	第4半旬	第5半旬	第6半旬
各月の	1～5	6～10	11～15	16～20	21～25	26～最終
	日	日	日	日	日	日

2 発生量 - - - 病害虫の発生程度と広がり両面を加味したものをいう。

3 平年値 - - - 原則として過去10か年の平均とする。
データが10年に満たない場合は例年値とする。

4 平年値との比較

1) 時期

平年並	平年値を中心として前後2日以内
やや早い	平年値より3～5日早い
やや遅い	平年値より3～5日遅い
早い	平年値より6日以上早い
遅い	平年値より6日以上遅い

2) 量(発生量、発生面積等)

平年並	平年値並の発生で10年間に4回は発生する程度の普通の量
やや多い	「平年並」より発生が多く、10年間に2回程度の頻度で発生する量
やや少ない	「平年並」より発生が少なく、10年間に2回程度の頻度で発生する量
多い	「やや多い」より多く、10年間に1回程度しか発生しない量
少ない	「やや少ない」より少なく、10年間に1回程度しか発生しない量

- 農薬の使用にあたっては使用基準を遵守すること -

予報本文の見方

(例)

3 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平年比少ない（前年比少ない）
丹波 平年比やや多い（前年比やや多い）
発生時期：第3世代幼虫ふ化期8月第3～4半旬（平年並）

- ・「予報内容」は、今後の病害虫発生状況や発生時期の予測を平年比として示しています。
- ・平年比の考え方は、「I 用語の定義」の「5 平年値との比較」を参照してください。
- ・（ ）内の前年比は前年の実際の発生量（時期）との比較を示しています。
- ・必要に応じて地域別に示しています。

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、第2世代の発生量は山城で平年比少なく(-)、丹波でやや多い(+).
- (2) 第1世代成虫のフェロモントラップへの誘殺盛期は平年並であった。

- ・「予報の根拠」は、巡回調査の結果、天候、フェロモントラップへの誘殺状況、指導機関からの情報等、「予報内容」で示した発生量や発生時期の根拠となった事項を示しています。
- ・文中の(-)、(+)は、発生量の予想に影響を及ぼすと考えられるもので、(-)の場合は発生量が少なくなる要因、(+)は発生量は多くなる要因を示します。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、4回世代を繰り返す、第2世代成虫が7月下旬～8月上旬に発生し産卵する。
- (2) ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

- ・「発生生態及び防除上注意すべき事項」は、当該病害虫の生態、薬剤防除や耕種的防除上の留意事項、要防除水準等を示しています。

近畿地方 1 か月予報 (7 月 1 9 日から 8 月 1 8 日までの天候見通し)

平成 2 0 年 7 月 1 8 日
大阪管区气象台発表

< 予想される向こう 1 か月の天候 >

向こう 1 か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は、平年と同様に晴れる日が多いでしょう。

向こう 1 か月の気温は、高い確率 5 0 % です。

週別の気温は、1 週目と 2 週目は高い確率 5 0 %、3 ~ 4 週目は平年並または高い確率ともに 4 0 % です。

< 向こう 1 か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%) >

	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気 温	2 0	3 0	5 0
降 水 量	4 0	3 0	3 0
日 照 時 間	3 0	3 0	4 0

注意

大阪管区气象台から発表される天候の 1 か月予報の表現が、平成 1 8 年 9 月 2 5 日以降変わりました。

これまで病害虫発生予察の一つ根拠としていた天候の 1 か月予報の表現と整合性をとるため、病害虫防除所では上記の天候の 1 か月予報の表現を「**向こう 1 か月の気温は高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。**」としました。

お知らせ

残留農薬基準等のポジティブリスト制度導入に伴う農薬適正使用の徹底について

平成 1 8 年 5 月 2 9 日より食品衛生法に基づくポジティブリスト制度が導入され、いままで残留基準値が定められていなかった農薬成分と農作物の組み合わせにも、新たに国際基準等を参考として暫定的な基準値が設定されるとともに、参考となる基準がない場合には一律基準 (人の健康を損なうおそれのない量 ; 0.01 ppm) が適用され、基準値を超えて農薬が残留する食品 (農産物等) の流通が禁止となりました。このため、農薬の適正使用はもちろんのこと、周りの圃場の作物へ農薬が飛散 (ドリフト) しないように十分注意してください。

また、水田において農薬を使用するときは農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項等を確認するとともに、止水期間を 1 週間程度とし、止水期間の農薬の流出を防止するために必要な水管理や畦畔整備等の措置を講じるよう努めてください。

予報本文

イネ

1 穂いもち

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年並）

予報の根拠

- （１）７月中旬現在、穂いもちの発生量は平年並。
- （２）BLASTAM（いもち病発生予察システム）によると、好適感染条件が7月上旬に一部地域で出現しているが、頻度は低い（-）。
- （３）向こう1か月の気温は高く（-）、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）上位葉へ進展した穂いもちの病斑は、穂いもちの重要な伝染源となる。
- （２）穂ばらみから出穂後約3週間に、日照時間が少なく多雨多湿であると発生が多くなる。
- （３）コシヒカリなど発病しやすい品種や、すでに穂いもちが多発している田、山間部などでは特に注意し、防除適期に薬剤防除を実施する。
- （４）粒剤は種類により施用時期が決まっているので、適期に施用する。
- （５）茎葉散布剤を使用する場合は「出穂直前から穂揃期」「傾穂始め」の2回を基本とし、薬量が不足しないように散布する。
- （６）平成16、17年度の調査で**MBI-D剤耐性いもち病菌**が一部地域で確認されたので、薬剤の選定にあたっては注意する。

MBI-D剤：カルプロパミド（商品名：ウィンなど）、ジクロシメット（商品名：デラウスなど）、フェノキサニル（商品名：アチーブなど）

2 紋枯病

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや多い）

予報の根拠

- （１）７月中旬現在、発生量は平年比少ない（-）。
- （２）向こう1か月の気温は高く（+）、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）早植栽培で発生が多く、気温30前後で多湿条件が続くと多発する。
- （２）例年発生の多いほ場や分けつの多いほ場では発生が多くなるので十分注意する。
- （３）昨年多発したほ場では、深水管理をしない。
- （４）出穂20日前の発病株率が20%以上であれば薬剤散布を行う。散布は発病部である葉鞘によく付着するように株元を狙って行うようにする。なお、穂いもちとの同時防除を考慮する。

3 ニカメイチュウ

予報内容 発生量：平年並（前年並）
発蛾最盛期：8月第4半旬

予報の根拠

（1）7月中旬現在、発生量は平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（1）6月中旬と8月中旬の年2回、成虫が発生する。

（2）6月に成虫となった第1世代幼虫による被害が目立ったほ場、茎の太い品種やモチの作付田では発生しやすい。

（3）平坦部の野菜・チャ・イチジク等栽培地域の常発地では注意する。

4 セジロウンカ

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

（1）7月中旬現在、発生量は平年比やや少ない（-）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（1）海外からの飛来害虫である。

（2）成幼虫とも吸汁加害するので、株当たり10匹以上の発生を認めた場合は防除する。なお、幼虫は株元に生息しているので、薬剤が株元までかかるよう丁寧に散布する。

5 トビイロウンカ

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

（1）7月第3半旬現在、予察灯への誘殺を認めていない。

（2）7月中旬の巡回調査で、発生を認めていない（平年並）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（1）海外からの飛来害虫である。

（2）株当たり5匹以上もしくは短翅虫を10株当たり2匹以上認めた場合は、直ちに防除する。この場合、薬剤が株元に十分かかるよう散布する。

6 ツマグロヨコバイ

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

（1）7月中旬現在、発生量は平年比やや少ない（-）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（1）穂ばらみ期から出穂期に高密度であると吸汁による被害が生じる。また、排泄物により、すす病が発生する。

7 斑点米カメムシ類

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

防除時期：穂揃期及び傾穂期

発生予察注意報第1号を参照のこと。

8 コブノメイガ

予報内容 発生量：平年並（前年比少ない）

予報の根拠

（１）7月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）海外からの飛来害虫である。

（２）晩植・多肥田やこれらの水口付近、生育の遅いイネに集中飛来するので注意する。

9 その他

白葉枯病

（１）ヒノヒカリ、祭り晴は罹病しやすく、暴風雨などが予想される時は深水にするなど、極力葉の損傷を少なくするよう努める。

（２）窒素肥料の多用を避けるほか、茎立以降は露や濡れ葉状態の時にはほ場に入らないなど注意する。

フタオビコヤガ（イネアオムシ）

（１）近年、発生が増加傾向にある。山間・山沿い地域や集落周辺など、風通しの悪い水田で多発しやすく、また、曇雨天が多い年に発生しやすい。

（２）出穂前後に発生する世代の加害が多いと被害が出る場合がある。幼虫が4、5齢に成長すると摂食量が増加するため、被害が急激に拡大するので注意する。

イネクロカメムシ

近年、発生地域は拡大しつつあり、被害が増加しているので発生地、特に常発地では注意する。

黒大豆

1 吸蜜性カメムシ類

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比多い）

予報の根拠

（１）7月第3半旬現在、予察灯への誘殺数は平年比やや多い（+）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）開花期直前から若莢着生期に飛来し始める。

（２）ほ場周辺に雑草地などカメムシ類の発生しやすい場所があると、被害を受けやすいので、早期発見に努める。

（３）薬剤散布は若莢期から10日間隔で2～3回実施する。

2 サヤムシガ類

予報内容 発生量：平年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

（１）7月中旬現在、発生量は平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）年3～4回発生する。

（２）カメムシ類との同時防除を考慮する。

3 ハスモンヨトウ

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや多い）

予報の根拠

- （１）７月第３半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は平年比やや少ない（－）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）数百個の卵を塊状に産みつけ、ふ化した幼虫は若齢期（１～２齢）を集団で過ごし、葉の表皮を残して裏側を食害する。食害された葉は白く見えることから白変葉と呼ばれる。
- （２）齢が進んだ幼虫は周囲に分散し、かつ、薬剤の効力が著しく低下するので、発生初期の防除に留意する。
- （３）ほ場を見回り早期発見に努め、幼虫分散前の白変葉を取り除く。

4 ハダニ類

予報内容 発生量：平年並（前年比多い）

予報の根拠

- （１）７月中旬現在、発生量は平年並。
- （２）向こう１か月の気温は高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）繁殖が早く、高密度になってからでは防除効果が劣る。
- （２）晴天が続くと多発しやすいので注意する。

アズキ

1 ハスモンヨトウ

黒大豆の項参照。なお、ダイズに比べ白変葉が見つげにくいので注意する。

2 ハダニ類

黒大豆の項参照。

3 アズキノメイガ、マメノメイガ、サヤムシガ類

発生すると被害が大きく、莢に食入すると防除が難しいので、開花始めから７～１０日間隔で少なくとも２回は防除を行う。

果樹

1 ナシ 黒斑病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- （１）７月中旬現在、発生量は平年並。
- （２）向こう１か月の気温は高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）例年８月下旬から９月にかけて発生が増加するので、８月中下旬までに防除する。

2 ブドウ べと病

予報内容 発生量：平年比少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

- （１）7月中旬現在、巡回調査では発生を認めていない。平年比少ない（-）。
- （２）向こう1か月の気温は高く（-）、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）雨が多く、気温が低めに経過すると多発しやすい。
- （２）ハウス栽培では、過繁茂を避け通風をよくする。

3 カキ 炭そ病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- （１）7月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。
- （２）向こう1か月の気温は高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）カキノヘタムシガ、ハマキムシなどの食害部から発病することが多い。

4 カキ うどんこ病

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

- （１）7月中旬現在、発生量は平年比やや少ない（-）。
- （２）向こう1か月の気温は高く（-）、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）気温が低くて涼しい夏には発病が進展する。

5 カメモシ類（果樹全般）

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- （１）7月第3半旬現在、予察灯への誘殺数は平年並。
- （２）7月第3半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）果実被害は園により大きく異なる。特に、山林等の隣接園では注意する。
- （２）収穫が近いものも多いため、農薬の使用にあたっては使用基準を厳守する。
- （３）合成ピレスロイド系薬剤を連用するとカイガラムシ類やハダニ類の発生が増えることがある。

6 ハダニ類（ナシ、カンキツ、ブドウ）

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

- （１）7月中旬現在、発生量はナシで平年並、カンキツで平年比少ない（-）。
- （２）向こう1か月の気温は高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 晴天が続くと多発しやすいので注意する。
- (2) 合成ピレスロイド系薬剤を連用すると、ハダニ類が多発する場合がありますので注意する。

チャ

1 炭そ病

予報内容 発生量：山城 平年比やや少ない（前年並）
丹波 平年並（前年比やや多い）
防除適期：新芽伸育期

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、山城で平年比やや少なく（ - ）、丹波では平年並。
 - (2) 向こう1か月の気温は高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。
- 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 伝染源は、摘採されずに残った前茶期の病葉である。
- (2) 本病が感染するのは新葉に限られ、新芽伸育期に降雨が続くと発生が多くなる。

2 もち病

予報内容 発生量：平年並（前年並）
防除適期：新芽伸育期

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。
 - (2) 向こう1か月の気温は高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。
- 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 病斑上に形成された担子胞子が風雨で飛散し、新芽に感染する。
- (2) 山間地で発生が多い。

3 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平年比やや少ない（前年比やや少ない）
丹波 平年比やや多い（前年比やや多い）
発生時期：第3世代幼虫ふ化期 山城 8月第1～2半旬（平年比早い）
丹波 8月第4～5半旬（平年比やや遅い）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量は山城で平年比やや少なく（ - ）、丹波でやや多い（ + ）。
- (2) 第1世代成虫のフェロモントラップへの誘殺盛期は宇治で平年比早く、綾部で平年比やや遅い。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、4回世代を繰り返し、第2世代成虫が7月下旬～8月上中旬に発生し産卵する。
- (2) ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

4 チャノホソガ

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い（前年比多い）
丹波 平年並（前年並）
発生時期：第4世代幼虫ふ化期 山城 8月第4～5半旬（平年並）
丹波 8月第5～6半旬（平年比やや遅い）

予報の根拠

- （1）7月中旬現在、発生量は山城で平年比やや多く（+）、丹波で平年並。
- （2）第2世代成虫のフェロモントラップへの誘殺盛期は、宇治で平年並、綾部で平年比やや遅い。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）通常、5回世代を繰り返し、第3世代成虫が8月上中旬に発生し産卵する。
- （2）卵は3～7日でふ化し、新芽を加害する。
- （3）鉢摘み園の防除適期は、三番茶芽の第2葉開葉期である。

5 カンザワハダニ

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- （1）7月中旬現在、発生量は平年並。
- （2）向こう1か月の気温は高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）繁殖力は10～30の範囲で高温の時ほど高いが、降雨により増殖が抑制される。

6 チャノミドリヒメヨコバイ

予報内容 発生量：山城 平年比少ない（前年並）
丹波 平年並（前年比少ない）
防除適期：新芽伸育期

予報の根拠

- （1）7月中旬現在、発生量は山城で平年比少なく（-）、丹波で平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）主に新梢を加害し、新芽の被害症状は黄化、萎縮、葉先の褐変、黒変等である。

7 チャノキイロアザミウマ

予報内容 発生量：山城 平年並（前年並）
丹波 平年比やや少ない（前年並）
防除適期：新芽伸育期

予報の根拠

- （1）7月中旬現在、発生量は山城で平年並、丹波で平年比やや少ない（-）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）主に二番茶以後に増加し、夏秋芽を吸汁加害する。
- （2）多雨により発生は減少するが、生息密度が高いと多少の雨では影響が小さい。
- （3）発生の多い園では、三番茶芽の萌芽期と第1葉開葉期に2回防除を行うと効果が高い。

8 ミカントゲコナジラミ

ミカントゲコナジラミは、平成16年8月に国内で初めて、京都府においてチャへの寄生が確認され、分布が拡大している。7月中旬の巡回調査では、山城地域の多くの園で発生を確認し多発園も認めた。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 成虫の発生

年に4回発生する。

(2) 対策

農薬による防除適期は若齢幼虫期である。成虫発生期の散布では密度抑制効果が不十分であるため、成虫の飛翔が落ちついた頃を見計らって薬剤散布を行う。

(3) 登録のある薬剤

- ・ハチハチ乳剤(1,000倍、摘採14日前まで/1回)
- ・アプロード水和剤(1,000倍、摘採14日前まで/2回以内)
- ・アプロードエースフロアブル(1,000倍、摘採14日前まで/1回)
- ・ダニゲッターフロアブル(2,000倍、摘採7日前まで/1回)

野菜

1 うどんこ病(果菜類)

予報内容 発生量：平年並(前年並)

予報の根拠

(1) 7月中旬現在、キュウリ、トウガラシで平年比少なく(-)、ナスでやや多い(+)

(2) 向こう1か月の気温は高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 窒素肥料の過用を避け、茎葉が繁茂し過ぎないようにする。

(2) トウガラシ類では、ハダニ類の被害と類似しており判断がつきにくいので十分注意する。

2 べと病(キュウリ)

予報内容 発生量：平年並(前年比少ない)

予報の根拠

(1) 7月中旬現在、発生量は平年並。

(2) 向こう1か月の気温は高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 病原菌は多湿条件を好み、侵入やまん延には水分が必要である。

(2) 肥切れしたり草勢が衰えないように肥培管理に注意する。

3 褐斑病(キュウリ)

予報内容 発生量：平年比やや多い(前年並)

予報の根拠

(1) 7月中旬現在、発生量は平年比やや多い(+)

(2) 向こう1か月の気温は高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 病原菌の発病適温は 25 ~ 30 である。
- (2) 一度発生したほ場では、毎年発生がみられることが多い。

4 炭そ病 (キュウリ)

予報内容 発生量：平年並 (前年並)

予報の根拠

- (1) 7 月中旬現在、発生を認めている。
- (2) 向こう 1 か月の気温は高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 夏秋作に発生しやすいので注意する。
- (2) 窒素肥料の過用を避ける。

5 斑点細菌病 (トウガラシ、キュウリ)

予報内容 発生量：平年並 (前年並)

予報の根拠

- (1) 7 月中旬現在、発生を認めていない (平年並) 。
- (2) 向こう 1 か月の気温は高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 降雨等により病原細菌が飛散し、果実及び葉の気孔等から入って発病する場
合が多い。
- (2) 曇雨天が続くと急速にまん延するので、気象の変化に注意する。
- (3) 発生してからでは防除が困難となるので、予防防除が重要である。

6 ハダニ類 (チャノホコリダニを含む)

予報内容 発生量：平年比少ない (前年比少ない)

予報の根拠

- (1) 7 月中旬現在、発生量は平年比少ない (-) 。
- (2) 向こう 1 か月の気温は高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 薬剤が葉裏や生長点にかかるよう丁寧に散布する。
- (2) ハダニ類は薬剤に対する抵抗性が生じやすいので注意する。
- (3) 雨よけ栽培では発生しやすいので十分注意し、発生初期の防除に留意する。

7 ハモグリバエ類 (果菜類)

予報内容 発生量：平年並 ~ やや多い (前年並)

予報の根拠

- (1) 7 月中旬現在、発生量は平年並 ~ やや多い (+) 。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) トマトハモグリバエは、8 月以降多発する傾向がある。
- (2) トマト等抑制栽培で購入苗を使用する場合には、葉等に寄生していないこと
を確認する。
- (3) 施設栽培では、開口部に 0 . 8 mm 目合いの防虫ネットを張る。
- (4) 黄色粘着ロールをハウス周囲及び開口部に展張する。
- (5) 発生を認めたら被害葉を取り除き、発生初期の防除に留意する。
- (6) 施設マルチ栽培では、マルチ上に落ちた蛹を掃き集めて処分する。

8 アザミウマ類（果菜類）

予報内容 発生量：平年並（前年比やや多い）

予報の根拠

（１）７月中旬現在、発生量は平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）アザミウマ類には直接加害するだけでなく、ウイルス病を媒介するものもいる。

（２）雨よけ栽培では発生が多くなるので注意する。

9 ネギアザミウマ（ネギ）

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

（１）７月中旬現在、発生量は平年比やや多い（＋）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）年間、１０世代以上くり返し、葉の表層を食害、かすり状の食害痕を残す。

（２）葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。

10 ネギハモグリバエ（ネギ）

予報内容 発生量：平年並（前年比やや多い）

予報の根拠

（１）７月中旬現在、発生量は平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）幼虫が葉肉部分を加害し、白い筋状の食害痕を残す。

11 ハスモンヨトウ

黒大豆の項参照。

12 トマト黄化葉巻病とタバココナジラミ類

トマト黄化葉巻ウイルス（TYLCV: Tomato Yellow Leaf Curl Virus）の感染により引き起こされる病気であり、タバココナジラミ類によって媒介される。平成17年12月に府南部の抑制栽培トマトで発生が確認されて以降、最近では、平成20年1月に発生を確認しており、今後とも注意が必要である。

トマト黄化葉巻病の発生・拡大を防ぐためには、「トマト黄化葉巻ウイルスの伝染環を絶つ」ことが重要である。

【今後、定植するハウス】

（１）先端部の葉が内側に巻いているもの、葉縁が黄化しているもの、株が萎縮しているものは植え付けない。

（２）コナジラミが寄生していないかを確認してから定植する。

【栽培が終了または終了が近いハウス】

（１）発病した株については抜き取り、袋に入れて密封して枯死させるか土中に埋めて処分する。

（２）野良生えトマトも重要な伝染源となるので、自生したトマトは除去する。

また、媒介虫のタバココナジラミ類は、夏期以降の密度が高くなる可能性が高いので、抑制栽培では「総合的害虫管理」が有効である（タバココナジラミ類参照のこと）。

1.3 タバココナジラミ類

タバココナジラミ類は世界中に分布し、多くのバイオタイプ（形態的な区別が難しく、遺伝的、生物学的に異なる系統）が存在する。本州では在来系統（バイオタイプJpL）、バイオタイプB（従来のシルバーリーフコナジラミ）、バイオタイプQが確認されている。バイオタイプQは平成17年に国内で確認された侵入害虫で、発生確認後各地で発見されるようになり、平成20年2月には37都府県に分布を拡大している。

農業総合研究所と病虫害防除所が行ったコナジラミ類分布調査では、タバココナジラミ類は京都府全域に発生し、特に夏以降発生が増加することがわかった。平成17年にはバイオタイプQが府内で初めて山城で確認され、平成19年には福知山市まで発生地域が拡大した（平成19年11月6日付け防除所ニュース第14号参照）。また、平成20年6月の調査では、京都市以南で発生を確認している。

本種は薬剤感受性が低く難防除害虫といわれていることから、以下の3点を防除対策の基本事項として、防虫ネットや黄色粘着ロール及び農薬等を組み合わせた「総合的害虫管理」が有効となる。

- ・施設内にコナジラミを「入れない」。
- ・施設内・施設周辺のコナジラミを「増やさない」。
- ・施設内からコナジラミを施設外に「出さない」。

1.4 オオタバコガ、タバコガ、シロイチモジヨトウ

発生すると大きな被害になるので注意する。

オオタバコガ及びタバコガは果実に食入すると、またシロイチモジヨトウは齢が進むと、薬剤の効力が低下するので、早期発見に努め、食入前及び若齢期の防除に留意する。

1.5 カメムシ類（トマト、ナス、トウガラシ、インゲン等）

周囲に雑草地やダイズなどカメムシ類の発生しやすいほ場があると、被害を受けやすいので、早期発見に努める。

病虫害防除については、病虫害防除所・最寄りの農業改良普及センター又は農協にご相談ください。

詳しい農業情報は、農林水産省ホームページの「農業コナ」をご覧ください。
ホームページアドレス <http://www.maff.go.jp/nouyaku/>

農業改良普及センター 電話番号一覧

・京都乙訓	農業改良普及センター	075 - 315 - 2906
・山城北	農業改良普及センター	0774 - 62 - 8686
・山城南	農業改良普及センター	0774 - 72 - 0237
・南丹	農業改良普及センター	0771 - 62 - 0665
・中丹東	農業改良普及センター	0773 - 42 - 2255
・中丹西	農業改良普及センター	0773 - 22 - 4901
・丹後	農業改良普及センター	0772 - 62 - 4308

農作物病虫害情報サービス

- ・テレホンサービス
0771 - 23 - 6442
- ・ホームページアドレス
<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/>

京都府病虫害防除所

〒621-0806 京都府亀岡市余部町和久成9

TEL 0771-23-9512

FAX 0771-23-6539